

空き家再生プロジェクト② ～空き店舗の活用～

南葉杏海 下川原亮 坪坂璃乃 平手悠里

概要

本別町の空き家を再利用し、中高生向けの勉強スペース、休憩スペースの再活用することを目標としたプロジェクトである。本別町の空き家の多さを実感した4人の活動を紹介する。

1. はじめに

小さい頃から本別町の空き家の多いことを感じ、高校生になった今この問題の解決の手助けになったらと思い、このプロジェクトの提案をした。そして、この提案をした際に同じ問題に気付いていた仲間たちが多くいたので、このプロジェクトの活動を行うこととした。

2. 課題について

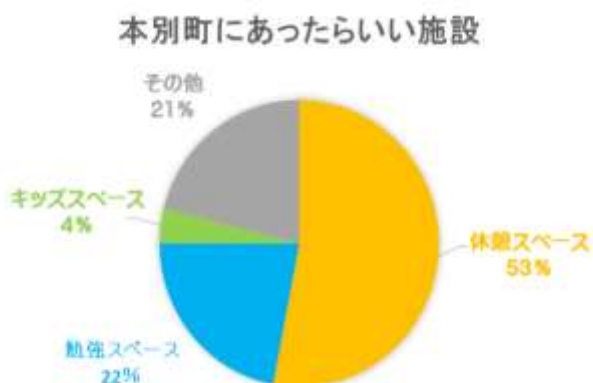
プロジェクト開始当初は本別町の全年齢の人を対象とした休憩スペースを計画していたが、難題が多く感じ断念し、中高生の自分たちにしか思いつかないものをプロジェクトとして進めたいと考え、ターゲットを中高生に変更し、活動を再開した。

そして、本別高校生の生徒に複数のアンケートを実施した。

3. 現状分析について

本別町の空き家の現状を若者目線でもっと知るために、本別高校生にアンケートを取った。

本別町にほしい施設は何かとの問いに、休憩スペース(53%)と勉強スペース(22%)を求める声が多いことが分かった。

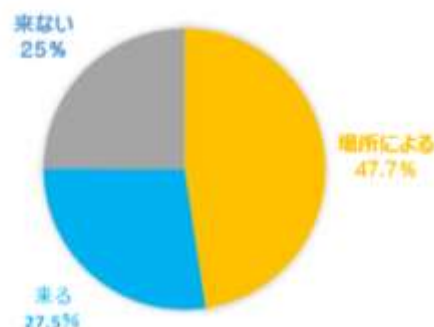


〔グラフ1：あったらいい施設〕

空き家を再生したとき、その施設に来る（利用す

る）かの問いには、場所による(47.7%)、来る(27.5%)、来ない(25%)との回答結果となった。利用しないと利用するはほぼ同数の2割半、そして、場所によると答えたのは4割。更に、場所によると答えた人に、どんな場所がいいかと問うと、「学校の近く」「明るい場所」「街中周辺」などの声が寄せられた。

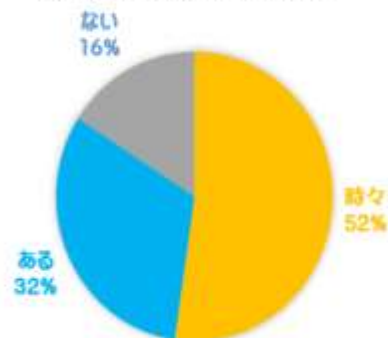
空き家再生施設にくる？



〔グラフ2：施設を利用する〕

本別高校生が放課後にどこか寄るような時間があるかの問いには、時々(52%)、ある(32%)、ない(16%)となった。時々が半数を占めており、時間がある人は3割であることが分かり、8割の人が空き家を再生した何かしらのスペースを利用するかの言う可能性があることが分かった。

放課後に時間はある？



〔グラフ3：利用する時間があるか〕

4. 仮説について

アンケート結果から、学校の近くで、かつもともと本別町にある「アースホール」よりも明るさや、入りやすさを重視した施設を探し、何かしらの実証実験を行い、実行に向けるのがよいのではないかと結論に達した。

高校生が勉強しに行きたくなるような、そして、行きたくなるような施設にするためにWi-Fi、自販機、複数名で勉強ができる大きなテーブルなどを設置することで訪れる人が増えるのではないかと考えた。

5. 解決策について

4の仮説のとおり、唐突に、休憩スペース、または勉強スペースの施設を設置したとしても利用者が来る保証はないため、期間限定で施設を開放するという形式で実証実験を行えば人の流れなどを掴む事ができるのではないかと考える。

そして、そのスペースにあったら便利なものを設置したりするのに便利なところは、「空き家」ではなく「空き店舗」であることも分かった。空き店舗にすることで一般住宅の空き家にはあまりない小上がりなどがあり、大きいテーブルを利用しやすいのではないだろうか。空き店舗の再利用を行うにあたり、店が密集する「銀河商店街」内の空き店舗を利用することで空き家の削減ではなく、商店街に人が集まり商店街の活性化ができるという一石二鳥の利点があるのではないかと考える。

さらに、商店街の空き店舗を再利用することで、中高生が普段利用しない昼間は、子育て中の母子親御さん、高齢者の方々の憩いの場を作る事ができる。

これらの事をまとめていくと、ターゲットにしている中高生の求めているような場所を空き家の再利用として作るには「空き家」ではなく「空き店舗」が好ましく、空き店舗に変更することで商店街の活性化などのデメリットがあることがあり初めにターゲットにしていた全年齢の町民をターゲットにすることができることとなる。

6. 成果と課題

取組の成果と課題を以下のまとめた。

【成果】

学校内の最終発表会后、本別町の空き家対策の協議会に参加した際、発表会などにおいて生徒からは質問されないような大人からの厳しい指摘や質問

などを頂いたが、プロジェクトを理解していただいたり、評価していただけることが多くあり、プロジェクトの成果を残すことができた。

【課題】

プロジェクト開始当初に行った空き家の現状を見に行く活動をもう少し多く確保し、現状をもっと知るべきだと感じた。

自分が見てきた表面上の「空き家」ではなく、もっと探索した空き家の現状や内部の状況をもっと自分たちだけではなく、多くの人たちが知るべきではないかと考える。

7. まとめ

今回のプロジェクト進行にあたって気が付いたことは、自分たちの考えを実行や発言するだけではなく、もともと公表されているデータにも視点をあて、そのデータも含め検討した上で、自分の考えを班員や探究コーチと議論しながら、解決策を組み合わせることでまとめていくことが大切である。

今後、もしこの活動が引き継がれるのであれば、空き家の参考文書をもう少し見つけて読むこと、空き家の現状を知る調査をすることを推奨する。

そして、もう1つ、もし再利用したいと思った空き家の持ち主との話をしていく中で、このプロジェクトに参加してもらえれば他の空き家の持ち主にも、取組や活動の良さの利点を感じてもらい、参加してもらえるのではないかと考える。

そして最後に1年弱ほどこのプロジェクトに協力していただいた、藤井さん、門田さん、林さん、学年担当の先生方には本当に感謝しています。ありがとうございました。

空き家再生プロジェクト② ～空き店舗の活用～

下川原亮 南葉杏海 平手悠吏 坪坂璃乃

概要

本別町の空き家を再利用し、中高生向けの勉強スペース、休憩スペースの再利用することを目標としたプロジェクト。本別町の空き家の多さを体感した4人が活動している。

1. はじめに

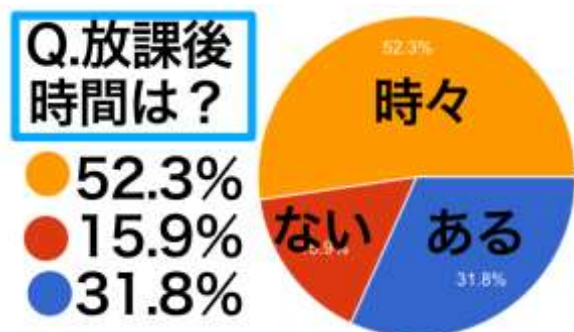
本別町の現状を見た時、空き家が多いと感じたのでどうすれば良いか考え、浦幌と同じように空き家、または空き店舗を使うことができないかと考えた。

2. 課題について

このプロジェクトは、初め、全年齢を対象で空き家を活用して街を明るく活気づけることを目的としたが、対象を中高生に絞り、空き家から空き店舗の利用という観点で活動を進めた。

3. 現状分析について

本別高校の生徒からアンケートを取った。「放課後に時間があるか」という問いに、時々あるという人が半数だった。この結果から、あまり時間ないため、来ることができないと考えた。[グラフ1]



[グラフ1：放課後、時間があるか？]

4. 仮説について

アンケート調査を実施し、「空き家再生した場合、来ますか」との問いに、場所によると回答した人は、47.7%が場所による、27.3%が訪れる、25%が訪れないと回答した。場所によると回答した人が多かった。[グラフ2]

この結果を踏まえ、一番人が集まりやすいところはどのような場所なのかについて考えてみた。



[グラフ2：施設に利用する]

5. 解決策について

アンケートもとに考察し、解決策として、人が集まる場所、つまり商店街が良いのではないかと考えた。町内で適する場所を探してみたところ、元雑貨屋入っていた場所が適する場であると考えた。適している理由として、周囲から中の状況がわかり安心感を与え、誰でも気楽に入りやすい店舗であるからだ。

6. 成果と課題

[成果]

成果発表表において、色々な意見をもらったが、町の居住対策協議会において、自分たちの考えを披露できたことが良かったし、よい経験となった。

[課題]

データを取ったが、詳しく調べていなかった事や考えた事があまり深掘りできなかった。見ただけでなくしっかり周りの人の意見を聞く必要があった。

7. まとめ

活動で難しい部分が多くあったが、その中で、街がどうあると楽しくなるか、どのような施設があると町の活気が出るようになるか想像して考えることがとても難しいと感じた。この経験を生かして、将来、同様な活動があればより大きなプロジェクトができれば良いと感じた。長い間、協力をして頂いた藤井さん、門田さん、林さん感謝の意を表します。

空き家再生プロジェクト② ～とまち創生学による探究活動～

坪坂璃乃 南葉杏海 下川原亮 平手悠吏

概要

本別町の休憩スペースが1つしかないことから、休憩スペースがあればよいとの考えを持ち活動しました。

1. はじめに

本別町に休憩スペースが1個しかないため、複数の施設があるとよいと考え、この活動に取り組んだ。

2. 課題について

休憩スペースがあったら良いと考え、全年齢を対象に意見をどのように集めたら良いか検討した

しかし、検討を進める中で、学生レベルで考えられる高校生からの意見を集めることとした。

3. 現状分析について

学生をターゲットに絞ってアンケート調査を行った。学生のアンケート結果からは、休憩スペースと勉強スペースがあったらよいとの回答が多くあった。5月の連休に、空き家がどのくらいあるのか街の様子を視察した。空き家の利用においては、平日だと学生たちは、昼過ぎまで学校があるので、午前中は高齢者や子育て世代の人たちに使ってもえればよいと考えた。

4. 仮説について

学生が集まるにはどのような施設・設備があるとよいのか、楽しんでもらえるかについて考えた。

高齢者にはボランティア形式で何かを行うこと、子育て世代には遊びスペースがあればよいのではないかと考えた。

5. 解決策について

休憩スペースなどの施設に設置するものとして、Wi-Fi、小上がり、自動販売機などがあればより快適に過ごすことができる。また、子育て世代には、アニメとか見られるプロジェクターがあればよいのではないかと考えた。

以上のことが実現可能ならば、町の人達と交流する場が増え、町も人も活気づき、雰囲気が明るくなって活性化できるのではないかと考えた。

6. 成果と課題

〔成果〕

- ・班員同士でするだけ意見を出すように意識した。
- ・商店街との関連性がとれており良かった。
- ・アンケート集計など素早く行動することができた。
- ・パワポの内容が図なども入れ、端的な説明を心がけわかりやすい発表を行うことができた。

〔課題〕

- ・初期段階からの目的やねらいがずれてしまった。
- ・コーチと一緒に交流する機会が十分でなかったため、グループLINEを有効に使えば良かった。
- ・1つの課題に集中しすぎたため、思考の深まりが浅く、論理的な視点がぼやけてしまった。
- ・高校生だけでなく、町民にもアンケートを実施することにより多くの情報が得られたのでは思う。
- ・計画的に空き家を視察に行くなどしてもよかった。

7. まとめ

私たちの空き家再生プロジェクトは、まだ深堀していけば続けていけるプロジェクトであるため、次の学年にも引き継ぎが可能ならば引き継いでいて欲しい。活動当初は、考えが深まらず、論議が進まない日もあったが、コーチや先生方のアドバイスや、他の班の話を聞いて取組の参考にしたため、ここまでやってくることができた。今更ながら、総合探究の時間外でも、何か自分だけで取り組めることはあったのではないかと思ひ後悔している。

最後に、私たちの空き家再生プロジェクトに加わってくれたコーチの皆さん、藤井さん、約1年間ありがとうございました。この1年間、本別について詳しく知ることができ、本別町という町は、多くの人から愛されている町であることに気が付きました。このような貴重な経験ができてよかった。今後も何か役立つことがあれば、活かしていきたいです。

空き家再生プロジェクト② ～空き店舗の活用～

平手悠吏 南葉杏海 坪坂璃乃 下川原亮

概要

空き店舗を利用した全年齢を対象にした憩いの場について検討した。

1. はじめに

街を歩いていると、ところどころに空き家が見られる。空き家が老朽化してきていて見栄えが悪い。使える空き家を使って、地域の人達が使える場をつくることとした。

2. 課題について

空き家を使って既にある「アースホール」より、使いやすい憩いの場を作れないかを考えた。そのためには、地域の人達が何を求めているのかを調べる必要があると考えた。

3. 現状分析について

全年齢を対象として考えることは難しいため、ターゲットを中高生に絞って考えていくこととした。

4. 仮説について

中高生が勉強や休憩できる憩いの場をつくることにより、空き家の有効利用や町が活気づくのではないかと考えた。[図1]

実現すれば…

昼→子育てする人
高齢の方
放課後→中高生

実現すれば…

建物も、町民の
皆さんも明るく！

[図1：実現したときのイメージ]

は、学生の勉強や遊べるスペースに上手く活用できる場や環境をつくればよいと考えた。[図2]



[図2：実現したときのイメージ]

6. 成果と課題

成果と課題を以下のようにまとめた。

[成果]

最終発表までに解決策をまとめ、本別の空き家再生について、町主催の協議会で発表できた。

[課題]

今後、どのようにして実現させるか考えていく必要がある。

7. まとめ

ここで終わることなく、次年度、自分たちでこの議題を進めていきたい。また、少しでもこの解決策が実行されたり、町の空き家対策を継続していけば、本別町の空き家が減って行くのではないと思う。

また、今回の探究でお世話になった藤井さんをはじめ、コーチの門田さん、林さん、一年間自分達にコーチングしていただき誠に有難うございます。

藤井さんやコーチのお二人がいなかったら、ここまでやってこれなかったと思います。改めて、この一年間本当に有難う御座いました。

5. 解決策について

中間発表後、班員とコーチで色々な案を考え、昼間は、高齢者や地域の子育て世代の人に、夕方以降